

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 108 回

『懐の深さ～ 「ミクロの世界でマクロの世界を思う」 ～ 』

5 月の連休中、高知へ行かれた新聞記者から、JR 高知駅前の坂本龍馬（真ん中 1836-1867）たちの像が送られてきた（添付）。大いに感激した。ところで、今、「医療改革」が叫ばれている。まさに、「黒船襲来」の後の「幕末」の様相ではなかろうか？ 今後、「医療」の「公武合体」、「大政奉還」、「明治維新」に向かうことであろうか！ 「21 世紀の勝海舟(1823-1899)、坂本龍馬、西郷隆盛(1828-1877)」の出番の時代的到来ではなかろうか。坂本龍馬が生きていたらどのような「医療の船中八策」を提案するであろうか？ まさに「歴史に学ばなければ、歴史が教えにやって来る」である。薩長連合、大政奉還の知恵も、坂本龍馬に授けたのは、「スケールの大きい、情の深い」と言われている勝海舟（1823-1899）である。「現代の医療維新の真のヒント」は、勝海舟の学びの中に、内包されているのではなかろうか！？ まさに、「21 世紀の勝海舟 出でよ！」である。

医師と患者が対等の立場で「がん」について語り合い、それを通じて人間を学ぶ『がん哲学外来』が 2008 年、順天堂医院で開設された。予約制・無料で実施した。「『がん哲学外来という わけのわからないところに よく来ましたね』」と言うと患者は笑う。そうすると顔が柔らかくなって、同じ目線で話せるようになる。2005 年、順天堂医院『アスベスト・中皮腫外来』の立ち上げに携わり、多くの中皮腫の患者を診るうちに『がん哲学外来』の開設を考えるようになった。20 歳の頃から学び続けてきた元東大総長・南原繁(1889-1974)の「政治哲学」と、元癌研所長・吉田富三(1903-1973)の「がん学」をドッキングさせたのが『がん哲学』である。その根底には「がん細胞で起こることは、人間社会にも必ず起こる」という発想がある。だから、『がん哲学外来』では、がん細胞を通じて人間社会の病理も語る。南原繁の師・新渡戸稲造(1862-1933)の研究も続けている。新渡戸稲造から学んだことの一つは、「脇を甘くして懐の深さを示す」こと。『がん哲学外来』の基本精神もそこにある。2022 年 5 月 7 日は、放送大学 埼玉学習センター(大宮)での授業『がん哲学外来 ～ 言葉の処方箋 ～』に赴いた。真摯な質問が多数あり、大変有意義な時であった。まさに、「ミクロの世界でマクロの世界を思う」実践でもある。

